

幼児の早期教育に関する一考察

— 幼児教育におけるブルナー理論の位置を中心に —

今井康晴

(2009年10月6日受理)

A Study on the Early Education of the Infant
— Focus on the position of Bruner's theory in early childhood education —

Yasuharu Imai

Abstract: The purpose of this paper is to clarify the Bruner's early childhood education. This paper examined an education theory of Bruner in the change of early education as the clue. In section 1, it clarified about the history of Japanese early education. In section 2, it not only clarified about the hypothesis of Bruner which affected early childhood education, but it clarified about the error with Bruner by hypothetical understanding. A hypothesis of Bruner is "We begin with the hypothesis that subject can be taught effectively in some intellectually honest form to any child at any stage of development." In section 3, it clarified it about an intellectual early childhood education and a relation of Bruner. In section 4, I examined positioning of Bruner's theory in early childhood education.

Key words: Bruner, early education, Bruner's hypothesis, early childhood education

キーワード：ブルナー，早期教育，ブルナーの仮説，幼児教育

1. はじめに

「早期教育」という言葉に注目すると、多くの場合、対象として小学校やそれ以上の教育内容を、乳幼児や幼児に意図的に教育することを示す言葉である。そして「早期教育」という熟語を検討すると、発達の「早期」に「教育」を行う、という意味が導き出される。加えて「早期」と「教育」の間には、周知のように「何を」という教育目的・教育内容が隠されている。早期教育の教育目的や内容は、生活単元に則した教育内容、知的早教育と呼称されるような算数・国語など教科教育に即した教育内容、英才教育や才能教育とされるような音楽や水泳といった特定の能力育成など様々である。それらの早期教育における教育目的・内容は、時代背景や親のニーズによって変化してきた。

ブルナー (Jerome Bruner 1915-) は、1960年代を中心に、全世界で教育に多大なる影響を与えてきた。特にカリキュラムや教育方法において検討され、学問中心カリキュラムやスパイラルカリキュラム、発見学習などの理論的支柱となった。70年代以降、時代背景の変化や知的教育を重視した教育理論に対する批判もあり、ブルナーの教育理論そのものが軽視されるようになった。しかし、ブルナーの教育理論は、中等・高等教育における理・数を中心とした現代科学に特化したものではなく、後の研究をみると、幼児の協同学習に関する研究、乳幼児の言語獲得と母子関係に関する研究、幼児の文化の習得や獲得の研究、イギリスの幼稚園や保育施設に関するレポートなど、幼児教育に関わる研究成果を挙げている。こうしたブルナーの幼児教育に関する研究について、十分に明らか

にされているとは言い難い現状である。

そこで本稿では、ブルーナーの幼児教育における意義を明らかにするため、その手がかりとして幼児の早期教育における、ブルーナーの教育理論を検討する。また、幼児教育におけるブルーナー理論の位置づけを検討することで、早期教育の在り方などを展望する。

2. 早期教育の変遷

早期教育を巡る意義は、それぞれの時代によって異なっている。まず本項では、早期教育の変遷として、我が国における1970年代と90年代の早期教育ブームを分析し、その意義を明らかにする。

1970年代における第一次ブームでは、1971年中央教育審議会答申「今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本的施策について」において、幼稚園教育の積極的な普及充実が盛り込まれた。答申では、「幼児教育の重要性と幼稚園教育に対する国民の強い要請にかんがみ、国は当面の施策として次のような幼稚園教育の振興方策を強力に推進する必要がある¹⁾」と幼児教育を強調し、以下のように説明した。

幼児教育は、人間の一生に対して重大な影響があるといわれており、家庭・学校を通じてこれをどのように充実するかがこれからの重要な課題である。とくに小学校就学前の幼児に対して、家庭だけでは得がたい集団生活の体験を与えることは、幼児のさまざまな発達に対して大切であることが認められている。この分野における将来の新しい可能性を究明するため、さきに第2の1の1²⁾で述べたような先導的試行について提案したのもこのためである。

ところが、そのような試行は、その性質上、今後相当長期間にわたって特例的に実施され、その成果について結論を得るまでにはかなりの年月がかかると思われる。したがって、幼児教育の中心である現行の幼稚園に対しては、適切な振興方策を講ずる必要がある。現に幼稚園入園に対する国民の要請は強く、就学前教育として均等な教育の機会を望む声はきわめて高い。その普及率の地域的な格差を解消し、すみやかに機会均等をはかるため、希望するすべての5歳児の就園を第1次の目標として、幼稚園教育の拡充を促進する必要がある³⁾。

中教審においては、高度経済成長を背景に高等教育機関への進学、受験競争の激化などを受け幼児教育への改革を提案した。その中でも普及率による地域格差の是正、幼児の発達に適した教育、才能開発のための

幼児教育の可能性を示唆した。具体的には、実施には至らなかったものの、4歳児からの幼児学校構想を打ち出し幼児教育の拡充、整備を徹底した。こうしたブームの中で、様々な早期教育に関する著作や研究が産出された。なかでも井深の『幼稚園では遅すぎる』は大きな影響を与えた。

井深は大脳生理学に基づき「どの子も、0歳児からの育て方ひとつで能力を伸ばしていける⁴⁾」と主張した。彼は人間の頭の良し悪しについて、生まれた時は平等であり、先天的な天才や劣等生というものは存在せず、生まれてからの教育次第で、天才を作ろうとすれば作れるし、劣等生を作ろうとすれば作れるという仮説を提案した⁵⁾。そのため、生まれてから3歳までの教育の重要性を訴え、幼児の能力を最大限に伸ばす育て方や環境づくりを強調した。また、才能に特化した早期教育として、バイオリンの鈴木メソッド、石井式漢字教育、公文式算数教育などが実践されていた。

90年代における早期教育は、少子化やいわゆる「お受験」と呼ばれるような受験の低年齢化などによって、教育産業が早期教育へ参入し、早期教育ブームを形成した。しかし、90年代以降の早期教育を巡っては、70年代にあるような才能開発や英才教育に特化するものではなく子どもの発達段階を重視し、どの時期に何を学ばせることが、最も妥当であるのかといった、適時性や適切性を中心に議論された。高良らは、過剰な早期教育や習い事は、子どもに圧力を与え、子どもの余暇や自由を剥奪しノイローゼなどの病理現象を引き起こし、思春期になってから心理的な問題を引き起こすことなどを報告した⁶⁾。高良らにおける早期教育の問題は、他者との競争原理、自発性の剥奪、親からの支配と服従、脅迫的な向上心など早期教育を取り巻く雰囲気によって幼児が支配されていることに起因している。そして早期教育自体が幼児の発達に与える影響ではなくて、早期教育を行わせる社会や親にある願望などにあることについて危惧をした。

無藤は早期教育について、早期教育を行うこと自体を問題としているのではなく「子どもの考える力を引き出し、遊びの自在感を可能にするような、そしてまわりの物事への多彩な取り組みを導くような働きかけになっているかどうかなのである⁷⁾」と指摘した。彼は「わざわざ早期教育を行わなくても、子どもはその日常生活の端々で遊び暮らしつつ学んでいる…無論、それは子どもを放っておくことではない。子どもの様子に気を配りつつ、子どもの必要に応じていくことである⁸⁾」として、子どもの発達を重視した。

以上を踏まえると、70年代における早期教育は、高度経済成長の後押しを受け、主に人材育成や才能教育

といった教育を推進し、90年代においては少子化、受験の低年齢化を受け、胎教、乳児向けの教育も含めた早期教育へと発展しつつ、早期教育の在り方や子どもの発達自体が論究された。

こうした二つの早期教育ブームにおいて、ブルーナーの幼児教育理論はどのような位置付けであろうか。

3. 幼児教育とブルーナー仮説

周知のようにブルーナーは1960年に出版され、1963年に翻訳された『教育の過程』において、我が国の教育に多大なる影響を与えた。中でも大きく取り上げられたのが、「ブルーナー仮説」とされるレディネスに関する試論であった。

ブルーナーは、「第3章 学習のためのレディネス」において、“We begin with the hypothesis that subject can be taught effectively in some intellectually honest form to any child at any stage of development.”⁹⁾ という仮説を提唱した。『教育の過程』を翻訳した佐藤は、この仮説を「どの教科でも、知的性格をそのままにたもって、発達のどの段階のどの子どもにも効果的に教えることができる¹⁰⁾」と翻訳し反響を呼んだ。ブルーナーの仮説は、レディネスの項目以外でも、子どもの知的発達の過程、学習という行為、スパイラルカリキュラムとの関連において、その趣旨が繰り返し強調された。

「どのような観念でも、そのまま、また有効に学齢段階の子どもの思考形態のなかに示すことができるということ、しかもこのようにはじめにそれを示すならば、それはこの初期の学習によってそれだけ容易に、あとになってもっと強力に、また正確になるということである¹¹⁾」。「科学的観念を教えるには、小学校の水準においてさえも、子どもの認知力が発達する自然の経路に盲従する必要はない。科学的観念は教え方によっては、子どもをさらにさきに向かって発達させるように、彼を上げますものであって、しかも彼が使いこなせる機会を提供することによって、彼の知的発達をうながすことができるのである¹²⁾」

こうした仮説を基調とした彼の提案は、その理解のされ方によって、様々に展開されていった。60年代以降、「教育内容の現代化」、学問中心カリキュラムなどの影響もあり、仮説は、その性格から幼児教育の分野、特に知的早期教育を助長、推進するものとして理解されていった。その中でも佐藤は、仮説に基づいた早期教育に期待を寄せていた。佐藤は、ブルーナーにおけるレディネスの在り方として、子どもの自然発生的に熟することを待つことなく、作り出すものであるという理論を踏襲し仮説を理解した。よって彼は「知

的早期教育は、単純に、既成の教育内容をそのまま低学年に下ろすことだと理解されている場合がないでもない。児童中心主義は子どもの知的能力を過小に評価する傾向があった。しかし、その反対としての知的早期教育は児童の知的発達の特性を無視することがあってはならない¹³⁾」と指摘した。このように佐藤は、仮説の示す発達段階のどの時期であっても、子どもの思考に訴えれば、科学の基本を把握することが可能であり、それを備えた子どもはもっと先の科学概念へと進むことができるかと理解し、そのうえで「まさに『教育の過程』こそ、構造、概念、創造性、知的早期教育を大胆、かつ率直に提起しているのである。ブルーナーのこの書物が、その後の教育課程作業において使用される教育上の諸概念の枠組みを与えていることは極めて明らかである¹⁴⁾」と強調した。

しかし、仮説に関する翻訳や理解については、必ずしも知的早期教育と結びつき、助長されるものではないとの見解が示されるようになった。その例として、本項では三嶋、平光、波多野による仮説の理解を挙げる。

三嶋は、仮説が提案されたウッズ・ホール会議の性格に着目した。ウッズ・ホール会議の主旨は、初等・中等教育における理数科教育のカリキュラム、教授法、教材の改良を目的とされた教育審議会であった。そして会議に出席した34人の構成員は、心理学者、理数科、視聴覚などの教育者、技師、歴史学者、古典学者であり、教育全般を審議するには限界があった。そのため三嶋は会議で提起されたブルーナーの仮説について、全教科、つまりあらゆる学問の教育というよりも、算数、生物、化学、物理の初歩をいかに効果的に教えるかという問題に対する一つの解答を提出されたにすぎないと述べた¹⁵⁾。三嶋は仮説を「理数科の基礎概念をなす『題材』はどれでもそれなりの仕方教えようがある、というごく当たり前の提議に付随した“in some form that was honest”という不定形容詞と過去形動詞のついた留保条件は、『その題材(概念や理論)の本来の趣旨に即したなんらかの仕方』という意味であって、『知的性格をそのまま保って』という主張ではない¹⁶⁾」と指摘した。加えて彼は、他の教科と同様に、小学校低学年段階では教えようがない題材や、逆に早期に教えた方が効果的な題材もあり一概には言えないのであり、ましてブルーナーには、就学前の幼児教育について、基本命題を適用する意図はなかったと主張した¹⁷⁾。

次に平光における仮説の理解では、はじめに仮説について、「『現代科学の原理や基本概念』が、教え方次第で、何歳でも教える、と大胆に予言したものでない¹⁸⁾」と断定した。その理由として平光は以下

のように指摘した。

「仮説」を構成する数個の句は、『教育の過程』を構成する数個の章のテーマー構造、直観、レディネス（発達）、自生的動員などに関するブルーナーの考えと対応しているものであり、だから同書の全章の要約なのである。例えば、問題の句「知的性格をそのままもって」は、「何らかの知的に率直な形で」という句によって、率直で忍耐づよい、また勇気ある直観の意義を説く章と対応しているのである。「仮説」の主語をなす「どんな教科内容でも」という一句には、諸教科の内容の共通の根底をなすひと組の単純で強力な、だからだれにでもわかるし説得力も大きい原理、構造、価値、人間の条件など「根本的観念」が横たわっていること、もし学校がこの「教育」をカリキュラムの核ないし軸として導入すれば、肝心の子どもの主体性（態度、能力、意欲）が助成され増強されることになるから、人格発達は確かにされ、この「教育」の考えが無いから難渋している昨今の教授も学習も一段と容易にされその質が改善されうるはずだ、という考えが凝結されている。「構造の重要性」の章がその句に対応しているわけである。同様に、「仮説」の中の「どんな子どもにでも」教えようという句は、すべての子どもが学習にたいする自生的内発的動機づけを秘めているという考えに立って、内的自生的な動機づけや報酬と、外的非自生的なそれとのバランスの必要を説いた「学習動機づけ」の章と対応し、その考えを背景にしているのである。「教材教具」を扱う終章は、「ブルーナーの仮説」がいつている「根本諸観念」を育てる「教育」のための特別な教材教具、方法技術が、科学の基本諸概念などを教える通常の教授のための教材教具や方法技術とは別にもう一つ要するという考え、つまり教授と「教育」の相対的区別の考えに立って書かれているわけである¹⁹⁾。

平光は、仮説を『教育の過程』における各章との対応においてその意義を見出し、子どもたちに現代科学を教えることを動機とし、教え方次第でそれは可能であるという予言を示したのではないことを強調した。それゆえ彼は、佐藤により翻訳されたブルーナーの仮説にある「現代科学は何歳でも教えよう」という理解を否定した。彼は『教育の過程』序文にあるブルーナーの「本書は、自然科学と数学の最良の教授法にいくぶん専門化されていると思われるかもしれない。それは過去十年以上にわたる歴史的偶然の結果によるものである。読者は、本書を科学と科学教育を強調する

ための宣言書と捉えてはならない²⁰⁾」という解説を根拠として、「ブルーナーが教えたいものは、“what science is”ではなく、“what science is about”なのであった。科学がそれであるもの、つまり科学そのものではなく、科学がそれについての科学であるもの、つまり科学の根底の『構造・原理・価値』を育てたいのであった²¹⁾」と指摘した。

波多野は、佐藤の翻訳について「『知的性格をそのままにたもって』とはどういう意味であろうか。原文では“in some intellectually honest form”である。この訳は、あきらかに、適訳とはいいがたい²²⁾」と主張した。波多野は、ブルーナーの提案を科学者が得た最先端の知識を、子どもたちが理解できるように、発達、概念、思考に合わせてごまかしなく翻訳することとして理解した。そのため彼は「ブルーナーは、ごくあたりまえのことをいつているにすぎない。つまり、教育研究者がすぐれた翻訳を完成すれば、それは、教科をごまかしなく教えるものであるとともに効果的でもありうるのだ、ということである²³⁾」と述べた。

またブルーナーは、『認識能力の成長』において『教育の過程』の中心的概念を成長に関する従来の概念とは異なるものとして位置づけ、その主張を「子どもたちにある考えを伝えるには、その年齢に適した方法があるということ、そして子どもにレディネスができあがるまで、ただ手をこまねいて待っているだけというのは、教育的にみて、無益であるということである²⁴⁾」と主張した。このことから、「どの教科でも、発達のどの段階の子どもたちに教えることができる」という意味ではないことが推測される。

4. 知的早教育とブルーナー

このようにブルーナー仮説の解釈は、三嶋、平光、波多野が示したように知的性格をそのまま保って、発達のどの段階の子どもにでも教授できる、という強い意味ではなく、まして知的早教育を促す意味合いのものでもない。その根拠として、後のブルーナーの講演や研究などにおいて証明されている。例えば1972年に来日した際の講演において、彼は、幼児における知的な事柄について教育の仕方による理解速度の速さや習熟について問われた際に、「子どもがいろいろな領域においてどんどん成長していく過程を、親がしっかりと認識し、建物を建てる時にまわりを建てる骨組みのように、親が骨組みを手に入れて、まわりから助けてやるといったことを早くした方がよいわけで、それが早教育の意味なのです。しかしこれは親が子どもにおしつけるべきことではありません。早期教育はよいけ

れども、そのためには非常に注意深く、やさしく、子どもの気持ちを尊重して行うべきである²⁵⁾」と対応した。加えて、彼は幼児教育に対しての知的教育か、あるいは情緒教育かということの区別を重視せず、議論することの意義でさえも疑問視した。インタビューアであった佐藤は、再度、ブルーナーの考える正しい知性の教育、知育の早教育について質問したが、ブルーナーは幼児の言語獲得における育児の在り方や母子関係について言及しただけであった²⁶⁾。

また70年代以降のブルーナーの関心は、「私はいまや、貧乏といい、都市生活の破壊といい、我々が抱えている大量の問題に国民が共同して取り組むこと、そしてその目的のために科学技術を有効に使うことを国民が、学ぶことができるような社会的革新を予期しつつある²⁷⁾」と指摘したように、アメリカ社会における貧困と教育との関係性であった。それは、社会的・文化的な環境や社会背景が、どのように育児に影響を及ぼすのか、貧困家庭に育った子どもが、大人になって貧困家庭を形成するといった負の連鎖を断ち切るために必要な教育とは何か、という社会制度や教育制度に関わる問題であった。

したがって、ブルーナーにおける幼児教育は、早期教育における知的な側面を指すものではなく、読む・書く・話すといった文化を獲得し、負の連鎖を断ち切るための早期からの教育であった。その意味においてブルーナーは、早教育を単一のクラスにおいて始めるべきか、クラスの外で始めるべきか、ということを重視せず、状況に応じて子どもの能力を表現させるような機会と刺激を与えることを優先した。そして彼は、子どものインシアチブや自発性を奪うことや強制を否定し、子どもが興味をもって自力で続けていけるような教具、教材、おもちゃなどを考案すべきだと主張した²⁸⁾。

以上のようなブルーナーにおける早期教育論を検討すると、まずブルーナー仮説から想起されるような知的早教育を示唆するものではない。ブルーナーの60年代教育における関心は、一般的な子どもの能力を前提として、カリキュラムや教授法による合理的、創造的な知性の育成や発達を目指すものであった。したがって、その象徴としてブルーナーの仮説は、その理解のされ方から、一般教育に留まらず、幼児教育においても知的な教育が適応され、我が国においては知的早教育ブームと呼びし反響を呼んだ。

70年代に入ると、早期教育は我が国では幼児の知的な側面を期待された教育であり、アメリカでは、社会底辺の子どもたちを対象とした「人間を人間らしくする」ための早期からの教育であった。そのため双方がもつ幼児の早期教育の意義がまったく異なっている。

加えて早期教育の目標や目的となる観点が、我が国では教材、教育方法、年齢の適時性であるのに対し、アメリカでは、階層社会の根本的な改革と社会における適切性に向けられていた。したがって社会との適切な関わりとともに文化をどのように獲得していくかが、ブルーナーの幼児教育の命題であった。

それは、文化の差異をなくすことを目的とした立案者として関わったヘッド・スタートプロジェクトによる見解において見出すことができる。ブルーナー自身が『教育の過程』を再考する中で「1970年代では、教育改革の関心は、もはや学校を、カリキュラムによって内部から変革することではなくて、社会の諸必要に、全学校を総体として再適応させること、つまり学校を制度として変革することである。われわれに向かって挑戦するようになったのは、もはや改革ではなく革命である²⁹⁾」とし、学校再編という根本的改革によって学習者である子どもをいかにして活気づけるか、創造性や独創性といった感覚をどのようにして育成するか、という態度で臨んだ。そして彼は貧困という問題から、文化の剥奪の克服、さらには学校教育での学習のしかたに文化というものがいかに影響しているかということに没頭していった。これらのことをふまえても彼の早教育の意図が理解できる。

5. まとめ

本論文では、ブルーナーの幼児教育論を解明するにあたり、その手がかりとして幼児の早期教育における、ブルーナーの意義を検討してきた。その手がかりとしてブルーナーの仮説を中心に、その理解とブルーナー自身との関心の差異について言及した。

最後にブルーナーは自伝において、仮説による反響についてとまどいを見せると共に、それに固着することに疑問を投げかけていた。自伝の中で彼は、『教育の過程』を執筆するにあたり、ブルーナーの印象としての「議長レポート」であり、「ワンマン・レポート」であることを明かしている³⁰⁾。そして『教育の過程』に関する反響について、「成功に、うれしかったが、懐疑的であった³¹⁾」と述べている。

「最も議論を招く主張」として仮説を挙げ「それは文字通りにとらえやすく、私は、6歳児が微積分を学ぶことができると思うのかと問う、懐疑的な先生たちに絶えずであった。私はいつも、微積分には(あるいは『ハムレット』、進化論、その他何であろうと)たくさん直観的な概念があって、それを早くから理解することは、後々の十分展開された考えを学習するのに役立つでしょう、と答えてきた」とブルーナーが述

べるように、仮説が教育の知的な質の改善という意味での役割をもつと同時に、早期教育のように意図的な知的教育を指すことではないことが理解できる。

そして学問中心カリキュラムなどで提案された物理、数学、歴史、文学は、知識の宝庫であるよりも、知性を働かせる方法の宝庫であるとし、その学問分野の細部にわたる意味は「文化」によってまとめられている。このことを踏まえると、ブルーナーの幼児教育の展望としては、70年代以降の「文化剥奪」からの克服を出発点として、幼児を媒介とする、家庭教育や母子関係、あるいは幼稚園、保育所などにおいて「文化」をどのように獲得するかが挙げられ、60年代の知的教育を皮切りに、その反省として70年代の「文化」を基調とした教育、さらに90年代以降のブルーナーの幼児教育に意義を見出すことができるのである。

我が国において、所得格差や階層化社会による学力差への影響が危惧されている。こうした現代における格差問題は、70年代アメリカの状況と類似しているように思われる。アメリカでは人種問題や移民問題などによる複合的な原因であったが、我が国の場合、それらがないだけに改善には困難が予想される。よってブルーナーが臨んだように、社会そのものを変革すること、そして、経済状況や家庭環境や恵まれない子どもたちに、適切な文化を育ませるような早期の教育が求められているのではないだろうか。

ブルーナーの幼児教育における展望としては、教育に望ましい環境、遊び、教育施設などを含め、文化を基調とした幼児教育理論を明らかにすることが今後の課題として挙げられる。

【注】

- 1) 文部省 中央教育審議会答申「今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本的施策について」1971/6 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/710601.htm (2009/08/22参照)
- 2) 2. 初等・中等教育改革の基本構想における「人間の発達過程に応じた学校体系の開発」にて、(1) 4・5歳児から小学校の低学年の児童までを同じ教育機関で一貫した教育を行うことによって、幼年期の教育効果を高めることなどを示していた。
- 3) 前掲 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/710601.htm (2009/08/22参照)
- 4) 井深大『最新版 幼稚園では遅すぎる』ごま書房 1998 5頁
- 5) 同上 16-17頁
- 6) 高良聖『警告！ 早期教育が危ないー臨床現場からの報告』日本評論社 1996 15頁
- 7) 無藤隆『早期教育を考える』日本放送出版協会 1998 218頁
- 8) 同上 220頁
- 9) Jerome Bruner *The process of education* HARVARD UNIVERSITY PRESS・CAMBRIDGE・MASSACHUSETTS・LONDON・ENGLAND 1960 p.33
- 10) ブルーナー著 鈴木祥蔵 佐藤三郎訳『教育の過程』岩波書店 1963 42頁
- 11) 同上 訳書 43頁 原文 p.33
- 12) 同上 訳書 50頁 原文 p.37
- 13) 同上 『教育の過程』157頁
- 14) 同上 137頁
- 15) 三嶋唯義『ピアジェとブルーナー』誠文堂新光社 1976 108-109頁
- 16) 同上 109頁
- 17) 同上 109頁
- 18) 平光昭久「『ブルーナーの仮説』再考」日本教育方法学会編『自己学習能力の育成と授業の創造』明治図書 1992 42頁
- 19) 同上 43頁
- 20) Ibid. Bruner *The process of education* p.10
- 21) 前掲 平光昭久「『ブルーナーの仮説』再考」45頁
- 22) 波多野諄余夫「『学習のためのレディネス』をどう考えるか」『授業研究』No.54 明治図書 1968 54頁
- 23) 同上 55頁
- 24) Jerome Bruner, Rose Olver and Patricia Greenfield. *Studies in Cognitive Growth, -A Collaboration at the Center for Cognitive Studies-*. John Wiley & Sons, Inc. 1966 p.10 ブルーナー 岡本夏生他訳『認識能力の成長 上』1970 明治図書 13-14頁
- 25) ジェローム・S・ブルーナー 佐藤三郎訳編『人間の教育』1972 誠信書房 9頁
- 26) 同上 13-21頁
- 27) Schooling Children in a Nasty Climate: Jerome Bruner interviewed by Elizabeth Hall *Psychology today* 1982 p.59
- 28) 前掲『人間の教育』41頁
- 29) 平光昭久抄訳「教育の過程を再考する」『現代教育科学』1974 76-77頁
- 30) Jerome Bruner *In Search of Mind-Essays in Autobiography-* Harper & Row, Publishers 1983 pp.182-183 ジェローム・ブルーナー 田中一彦訳『心を探して ブルーナー自伝』1993 みすず書房 298頁
- 31) Ibid. p.183 訳書 299頁

(主任指導教員 土橋 寶)